Institute of Human Culture Studies Otsuma Women's University

Newsletter

No. 4

2017

CONTENTS

大きな夢を膨らませて …… 1
競争的外部資金の獲得支援事業 …… 2
科研費採択課題を紹介します …… 2
人間生活文化研究所 共同研究プロジェクト採択課題を紹介します …… 10
大妻女子大学 戦略的個人研究費採択課題を紹介します …… 11
電子書籍「Otsuma eBook」…… 12
国際学術研究・協力・交流事業 活動報告① …… 13
平成29年度 研究費助成事業 …… 13
オンラインジャーナル『人間生活文化研究：International Journal of Human Culture Studies』 …… 14
国際学術研究・協力・交流事業 活動報告② …… 15
国際学術研究・協力・交流事業 活動報告③ …… 16
人間生活文化研究所 研究費助成事業関連 カレンダー 2017 …… 16

〈大妻女子大学人間生活文化研究所〉

大きな夢を膨らませて

大学の事業は大別すれば「教育」事業と「研究」事業から成り立っている。大妻女子大学の場合、原点は「教育」事業にある。しかし、近年多くの優秀な教員が本学に参集し、「研究」事業の地平を切り拓いて現在の「人間生活文化研究所」を創生してくれた。

「人間生活文化研究所」の採択する研究は、文字通り我々の生活文化に根差す森羅万象を考究対象としている。宇宙物理学や先端医療科学のような華々しさはないが、人々の身近な日々の暮らしに些かなりとも貢献したいとの強い志を持って地道に研究に励んでいる。

本研究所の活動履歴を振り返ってみると、本学も着実に変容しつつあることを実感する。

大妻は、自立自存の女子を育成すべく、長年女子教育に取組んできた。しかし、時代は確実に変化し、大学の存在理由もそれに応じて環境適用を迫られる。

仏国の哲学者アンリ・ベルクソンは、

> 存在とは変化することであり、
> 変化とは成熟することであり、
> 成熟とは自己を永遠に創造していくことである

と洞察しているが、本学はまさにこのスパイラル的変容を今、遂げつつある。その象徴が「人間生活文化研究所」の「研究」事業である。

２８年度からは「特別研究員制度」が新設され、外部の研究者にもご協力を仰ぎ、一層研究活動に厚みと刺激が加わることになった。また、最近は科研費採択の研究活動も活発になってきており、「教育」と「研究」のバランスが時代に相応しいものになりつつある。この研究所が大妻の単なる研究組織にとどまることなく、大志を抱いて日本の生活文化研究のCenter of Excellence（中核的研究拠点）に進化発展していくことを心から願いたい。

学校法人大妻学院
常任理事
重吉　博右

人間生活文化研究所の事業は、多くの企業の皆様からご支援いただいています。

前田建設工業株式会社
鹿島建設株式会社
清水建設株式会社
ダイダン株式会社
株式会社三井住友銀行
株式会社九電工
山崎製パン株式会社
株式会社オンワードホールディングス
三菱地所株式会社
株式会社岡村製作所
富士ゼロックス株式会社
株式会社三越伊勢丹プロパティ・デザイン
キユーピー株式会社
東京ケータリング株式会社
株式会社内田洋行

（順不同、2017年1月10日現在）

競争的外部資金の獲得支援事業

■大妻女子大学の科学研究費助成事業（日本学術振興会）の新規採択件数「家政・生活学一般」で全国第5位、私立大学では第1位！！

過去4年の細目別新規採択累計数で、本学は細目「家政・生活学一般」において全国第5位、私立大学では第1位となりました。

また、平成28年度の本学の配分額は、新規・継続分合わせて67,730千円で、私立大学564校中100位でした。

平成28年度 科研費細目別採択件数上位機関（過去4年の新規採択の累計数）

家政・生活学一般

順位	機関名	新規採択累計数	累計配分額（千円）	応募件数累計数
1	静岡大学	6	6,200	9
2	埼玉県立大学	5	6,600	12
3	弘前大学	5	8,350	6
3	お茶の水女子大学	5	8,000	9
5	大妻女子大学	4	16,400	7
6	埼玉大学	3	3,900	5
6	千葉大学	3	3,100	4
6	山梨大学	3	3,000	6
6	信州大学	3	2,500	8
6	神戸大学	3	2,700	8
6	奈良女子大学	3	3,300	7
6	愛媛大学	3	2,000	4
6	高知大学	3	2,500	8
6	福岡教育大学	3	4,700	4
6	佛教大学	3	2,800	4

平成28年10月 文部科学省発表

■科学研究費助成事業申請講座「科研塾」

人間生活文化研究所では、大妻女子大学教職員、大学院生を対象に総務センター・総務グループと協働で科学研究費助成事業申請講座「科研塾」を開催しています。科研塾の開催は年3回ほどですが、申請内容に関する相談や専門家による申請書類の添削は随時受け付けています。どうぞご利用ください。

平成28年度第3回科研塾（9月、多摩キャンパス）

科研費採択課題を紹介します

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金／科学研究費補助金）は、人文・社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」（研究者の自由な発想に基づく研究）を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」であり、ピア・レビューによる審査を経て、独創的・先駆的な研究に対する助成を行うものです。（日本学術振興会ホームページより）ここでは、本学における平成28年度採択課題の中から、15課題を紹介します。

＜新規＞研究課題

穀類の摂取による高血圧症の予防効果と腸内代謝を介したメカニズムの研究

研究代表者　青江 誠一郎

所属　家政学部

種目　基盤研究（C）

研究期間　H28-H31

本研究は、これまでの科学研究費の成果を活用して、インスリン抵抗性の改善、脂肪組織の機能正常化により高血圧を抑制できるか検討することを目的としたものである。すなわち、肥満モデルマウスを用いて、各種穀類の摂取が、インスリン抵抗性と高血圧が改善するか、インスリン抵抗性に伴い脂肪細胞のアンジオテンシノーゲンの発現量上昇を抑制するかについて検証する。初年度は、肥満モデル動物を用いて、血圧と脂肪組織のアディポサイトカイン（アンジオテンシノーゲン、PAI-Iなど）の分泌の関係を調べている。同時に短鎖脂肪酸をはじめとした腸内代謝産物のメタボロミクス解析を行う計画である。さらに、GLP-1分泌量と血圧との関係についても調べ、短鎖脂肪酸の効果の可能性があった場合、短鎖脂肪酸受容体ノックアウトマウスを用いた検討により腸内代謝産物の影響を証明する予定である。

以上のように、本研究は、これまで構築してきた動物モデルとその評価系を駆使して、新たに高血圧症の評価系を加える研究である。これまで、血圧低下作用についてはアンジオテンシン変換酵素阻害作用の研究が主体であり、高血圧症の病態基盤であるインスリン抵抗性の改善に着目した研究はほとんどない。サプリメントや薬剤に頼らず、どのような食品を摂取すれば良いかが明らかとなれば、食生活の改善の提案と高血圧症を初期段階で予防・改善できる食事指導を提案することができる研究である。なお、平成26年度の本学の戦略的個人研究費により、マウス非観血自動血圧測定装置を導入し、研究を実施する基盤が整っていたことが本課題採択の大きな強みとなった。

＜新規＞研究課題

現代日本語の自他に関する構文的研究

研究代表者　天野 みどり
所属　文学部
種目　基盤研究（C）
研究期間　H28-H31

意味の生成や理解に欠かせない、その言語使用者が習得している文法的知識を、豊富な言語資料に基づいて解明する研究です。文は複数の要素（単語）の組み合わせで成り立ち全体で意味を表します。この意味が拡張し、要素の意味の総和以上となる場合もあります。どのような特徴を持つ文がどのような意味を表すかということは、抽象化された知識として使用者間に共有され、言語運用上重要な役割を果たすものと考えられます。本研究課題は、こうした文と意味の関係に関する文法的知識を、「自他」と呼ばれる現象に限定して明らかにしようとするものです。

「自他」とは概略「部屋が暖まった」と「母が部屋を暖めた」の対応に見られるように、〈自らの動作・変化を表す意味〉と〈他者への働きかけ動作を表す意味〉の対応を捉える概念ですが、日本語文には一見この対応から逸脱して見える例が様々にあります。例えば「田中氏は落雷で離れを焼いた」では田中氏は離れに対して何もしておらず「田中氏は落雷で離れが焼けた」とほぼ同じ意味を表します。しかし、そこにはそれぞれの元となる他動詞構文・自動詞構文の意味の違いが引き継がれていることが観察できます。

本年度は、構文の意味の拡張に関する研究会を本学で開催し、さらにその成果を日本語文法学会のパネルセッションで発表しました。今後も収集した実際の日本語使用例を資料として様々に逸脱的な特徴を持つ自他文を観察し、元となる構文知識の拡張という普遍的で柔軟な言語運用の様とともに、日本語ならではの自他構文の特徴も明らかにしていきます。

＜新規＞研究課題

学校の教員と取り組む合理的配慮指針に基づく教材開発と授業手法の開発

研究代表者　生田 茂
所属　社会情報学部
種目　基盤研究（C）
研究期間　H28-H30

代表者は、一人ひとりの児童生徒の困り感の軽減を目指して、特別支援学校や通常学校の先生とともに、最新の情報処理技術を用いて教材を手作りし、自立活動や学習活動の支援に取り組んでいます。前任の筑波大学附属学校教育局時代に始めたささやかな取り組みは、いまや、国内の80校近くの先生、そして、オマーンや中国、アメリカやUAE、韓国などの先生を含めた国際的な取り組みとなっています。

学校の先生が日常感じる「A さんに有用な教材や教具が、必ずしもBさんにとって有用とは限らない」という体験を大切にし、先生一人ひとりが「どんなに忙しくても、一人ひとりの児童生徒のために教材や教具を手作りすること」を研究プロジェクトのモットーとしています。

「マルチメディアを扱えるドットコードを用いた教材の制作と教育実践」、「テキストをハイライトし、同期を取って読み上げる Media Overlays 機能を有する電子書籍の制作と教育実践」、「Augmented Realityを用いた教材の制作と教育実践」、「リコーの紙アプリを用いた、描くことの楽しみを伝える教育実践」などを行なっています。

本取り組みの成果や課題は、IGI Globalの発行する本の1章として、国際会議のプロシーディングとして、そして、毎年開催される日本特殊教育学会の大会における自主シンポジウムなどで報告し、国内外の学校の先生や研究者と共有しています。こうした、特別支援学校や通常学校の先生との手作り教材の制作と教育実践の取り組みは、科学研究費補助金が給付されている数多くの研究課題の中でも極めてユニークな、特徴溢れるものとなっています。

＜新規＞研究課題

星座カメラi-CANを活用した，日本中の小学校で星の学習ができる教材の開発

研究代表者　石井 雅幸
所属　家政学部
種目　基盤研究（C）
研究期間　H28-H30

小学校の理科授業の時間に、子どもたちが星空を観察することは現実的に難しい。そこで、各家庭での観察活動に頼ってしまっている。ところが、家庭での観察は曖昧な観察になりがちである。家庭での観察の問題を解決するためには、学校の教室できちんと指導しながら、「星の観察」を行う機会を増やさねばならないといえる。こうした問題意識から、我々の手がけてきたi-CANの機能アップとそれを活かした「星の観察」指導法の開発を提案することが研究の目的である。

星座カメラi-CAN は世界の各地に設置したインターネット遠隔操作カメラであり、このカメラを通して星空を観察できる。人間の目に近い視野をもっており、本当の星空に近い映像を昼間の教室で見ることができるようにした。子どもたちは、星の動きなどをリアルタイムで観察して確認できる星空の観察技法を獲得できるようになった。その結果として、i-CANを使って、日中に子どもが星空の観察法を知り、その夜、実際の星空を観ることができるような手助けを行えるようにシステム並びに指導法の検討を行っている。

小学校第4学年の学習の中で日本中の子どもが星の観察ができるようにすることが大きな目標である。その結果として、小学生が適切な教材・教具を用い星空の正しい観察を行うことができるようにしていきたい。この教材システムが確立することで、小学生の星空観察の機会が増えると共に、理科や自然事象への強い興味と関心をもった日本の子どもが増えることを期待している。

＜新規＞研究課題

中世後期ロンドンの「外国人」と都市社会

研究代表者　上野 未央
所属　比較文化学部
種目　基盤研究（C）
研究期間　H28-H30

中世ロンドンは、北西ヨーロッパの主要交易地であり、多様な人やモノが行き交う場でした。そのため、中世のロンドンを理解するためには、「外」との関係性を明らかにすることが必要不可欠であると考えています。今年度から開始した研究課題「中世後期ロンドンの「外国人」と都市社会」では、14・15世紀にイングランド以外の土地からロンドンにやってきて一定期間滞在した人々や、ロンドンに移り住んでそこで生涯を終えた人々に焦点を当てます。そして、「外国人」がロンドンでどのように生きたのか、また都市社会が「他者」にどのように接したのかという問題に取り組んでいます。なお、政治状況や王権・都市当局の都合で「外国人」とされる人々の範囲は容易に変動したことには留意が必要ですが、本研究は史料に Alien として現れた人々に着目します。

今年度は、先行研究の収集および整理を行っています。8月にはロンドンに赴き、大英図書館とロンドン市文書館(London Metropolitan Archives)で史資料の収集を行いました。中世以降の都市参事会の議事録、同職ギルド、教区教会の記録などが保管されているロンドン市文書館では、「外国人」の遺言書について、その検認記録がどれほど残存しているかの調査も開始しました。

他にも、今年度は、研究分担者である中部大学の佐々井真知先生や、同年代の研究仲間との勉強会を数回行いました。先行研究の収集・整理に加えて、このような情報交換を行うことで、研究課題に関わる問題点の整理を行っているところです。

＜新規＞研究課題

伝統的農法「稲田養魚」の高い米魚生産性を支える生態系プロセスの科学的検証

研究代表者　小関 右介
所属　家政学部
種目　基盤研究（C）
研究期間　H28-H30

近年、身近な二次的自然である水田において、生物多様性の減少や生態系の劣化が叫ばれる中、水田が本来有する生態系プロセスや生態系機能を高度に活用して環境保全と農業生産を両立させる新たな時代の稲作体系が模索されている。こうした背景の下、本課題は同じ水田で米と魚を同時に生産する伝統的農法「稲田養魚」に着目し、この高い生産性をもつ生物共生型生産システムを支える生態学的メカニズムを解明することで、環境調和型農法の開発に寄与する新たな知見を提供することを目的としている。この目的のため、炭素および窒素の安定同位体比をツールとして、魚の在不在による水田生物間の食物網構造の違いを定量評価し、魚がもたらす水田の物質循環プロセスの変化が米の生育に寄与するかどうか、するとすればどの程度かを明らかにしようとしている。

採択初年度である今年度は、5月から9月にかけて、稲田養魚の国内有数の実践地である長野県佐久市で野外調査を実施し、イネ・魚（フナ）同時栽培の養魚水田とイネのみ栽培の慣行水田において、土壌、植物プランクトン、動物プランクトン、魚をはじめとする大型水生生物、イネの葉や籾等を採集した。8月、9月には大雨や台風の接近などがあり、天気を睨みながらのフィールドワークに苦心したが、無事当初計画どおりの作業を完遂することができた。現在は、採集した生物サンプルを乾燥・粉砕するなどの分析前処理を進めている。今後実施する安定同位体比分析により、水田内に放養された魚が駆動する生態系プロセスを明らかにできるものと期待している。

＜新規＞研究課題

エジプト・コプトの染織品とインド更紗の制作年代および制作地の特定に関する研究

研究代表者　須藤 良子
所属　家政学部
種目　基盤研究（C）
研究期間　H28-H30

コプトとはエジプトのキリスト教徒を指し、彼らの埋葬場所から発掘された衣類などがコプトの染織品（以下コプト裂（きれ））であり、コプト裂の文様からインド更紗の影響を読み取ることが本研究の目的である。1800年代からヨーロッパ人によるエジプトでの遺跡発掘が開始され、様々な発掘品が紹介されたが、コプト裂は彼らの文化的なルーツをめぐる物として注目された。なぜなら、そこにはヘラクレスの獅子退治や初期キリスト教美術の十字架や魚などのシンボルが文様化されており、ついでエジプトを支配したイスラムの文様も登場するからである。つまり裂にまつわる文様がエジプトの歴史を表している。綴織りもヨーロッパのタペストリーの技法であり、コプト裂はヨーロッパ文化の源と考えられている。1168年に灰燼と化すフスタートで発掘された裂類は3世紀から12世紀までの遺品である。従来は、花や植物の文様が中心となるのはイスラムの影響と指摘されてきたが、私が調査したものにはインド更紗と分かるものが多く含まれていたため、インド更紗の影響も大きいのではないかと考えた。この都市は10世紀に最盛期を迎え、東西の文物で溢れておりインドとの交流もあった。今まで考えられていなかった更紗との関係を明らかにすることで、物と人とがダイナミックに移動し影響しあうことが改めて実証できる考えている。また、コプト裂の多くは日本の美術館に戦前に収集されており、なぜ極東に多くコレクションされているのか、欧米人にとっては大変不思議なようである。ある時期日本でコプトやアンデスの裂を収集することが流行した。これも一つの興味深い事例であり、その理由を探りたいと考えている。

科研費 KAKENHI

＜新規＞研究課題

手芸文化データベースの構築と教育現場への活用

研究代表者　中川 麻子
所属　家政学部
種目　基盤研究（C）
研究期間　H28-H30

日本では明治時代から女子教育の中心に手芸科目が置かれた。刺繍・編物・摘み細工・造花等、難易度の高い手芸が教授され、優秀な人材を輩出した。海外の手工芸教育は一部のグループに向けたものや職人養成訓練としての側面が強い。これに比べ、日本では明治～大正時代に設立された女子学校のほとんどで手芸教育が取り入れられ、国を挙げて高度な手芸教育がされた。しかし、現在では高等教育における手芸教育の減少が進むと共に、手芸は文化的価値が低いとみなされ、日本が誇った手芸技術と伝統は急速に失われつつある。研究も進んでおらず各校所蔵の手芸作品も活用されているとはいえない。

大妻女子大学は大正時代に裁縫と手芸の私塾として始まり、博物館にも多数の手芸作品が所蔵されているが、本学の被服学科であっても、当時の手芸カリキュラムや作品について知る学生は少ないのが現状である。しかし学生に当時の手芸作品を見せると強い興味を持ち、当時の作品レベルが高いことに驚く。そして「詳しく知りたい。ぜひ自分でもやってみたい」と言う学生が多い。若い学生にとっても手芸は魅力的であることが分かる。

本研究では、明治～昭和時代の手芸教育に脚光を当て、現存作品をアーカイブ化し、手芸文化データベースの基盤を作り、教育現場での活用と日本の手仕事を広く発信を目標としている。現在は大妻女子大学を中心に、関東近郊の大学博物館所蔵の手芸作品の調査、データ入力、各学校のカリキュラム調査等を行なっている。手芸文化データベース活用によって新たな手芸教育に役立てていく。

＜新規＞研究課題

ポスト3・11と原発事故被災者の「難民」化の実相

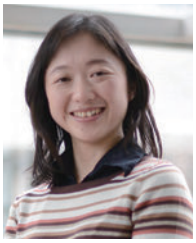
研究代表者　吉原 直樹
所属　社会情報学部
種目　挑戦的萌芽研究
研究期間　H28-H29

本採択課題は、過年度の同じ挑戦的萌芽研究「震災に関する民衆知／民俗知の意義と応用可能性に関する比較社会学的研究」（平成24～25年度）および「原子力防災訓練の検証と地域コミュニティの再審」（平成26～27年度）によって得られた知見の上に構想されたものである。幸い、前の二つの研究は、『「原発さまの町」からの脱却』岩波書店、2013年、および『絶望と希望』作品社、2016年、という形でその成果の一部を世に問うことができた。同時に、私自身、この間、日本学術会議社会学委員会の「東日本大震災の被害・影響構造と日本社会の再生の道を探る分科会」委員長として、包括的な災害知／復興知の形成とそれらの社会への発信に責任を負うことになり、本採択課題を含む3回の挑戦的萌芽研究の成果もそうした災害知／復興知に統合することが強くもとめられている。

そうしたことを強く意識しながら、本採択課題は、（1）新自由主義的な「経済的」復興が先行する中で、原発事故被災者の個別化と「難民」化が層としてつくり出されていること、また（2）そうした個別化と「難民」化がいくつかのディバイドを伴って進んでいることを明らかにし、その上で（3）被災者支援施策の中心に、（1）および（2）によって得られた知見を据えるべきであることを提言する。本採択課題による成果の一部は、すでに2016年9月19日に開催された日本学術会議シンポジウム「原発事故被災長期避難住民の暮らしをどう再建するか」において「帰還と移住の中の原発事故被災者コミュニティ」として発表されており、その内容は『学術の動向』2017年4月号に掲載されることになっている。本採択課題は最終的には、ローカルガバナンスにもとづく「複線型の復興」モデル構築のための素材提供の役割を担うことをめざしている。

＜新規＞研究課題

視線随伴パラダイムを用いたAgency調整システムの発達過程の解明



研究代表者　宮崎 美智子
所属　社会情報学部
種目　若手研究（B）
研究期間　H28-H30

自らが行為をしているという感覚は行為主体感（Sense of agency）と呼ばれる。たとえば、コンピュータのマウスを操作するとき、我々はマウスカーソルに自然に自己を帰属して操作を行う。このような自分以外のものに自分を投影させる能力（拡張された行為主体感）がどのように獲得され、組織化していくのか。本採択課題では、視線随伴パラダイムを用いて行為主体感の発達過程を明らかにする研究を進めている。

我々は、アイトラッカーを用い、視線の動きに連動して画面上のキャラクターが動いてイベントが起こる課題を作成した（右図）。この課題においては、自分の視線の動きに連動して動く「自己」キャラクターとそうでない「他者」キャラクターの2種類が交互に呈示される。呈示されているキャラクターのいずれかが乳児の視線に随伴していることを見出し、それに基づく視線の操作が求められる。すなわち、乳児がAgencyを感じられうるキャラクターを別のキャラクターから区別する要素を含んでいる。この視線随伴課題を用いて、①乳児が合目的な視線の操作をするか、②視線随伴性を伴うキャラクターとそうでないキャラクターの動きを区別し、いずれかに選好を示すか、という点について、5か月～8か月の乳児を対象に検討を進めているところである。

図. 視線随伴性検出課題
画面上の緑／赤色のキャラクターが自己／他者の視線に応じて操作できる。黄色い花のつぼみに触れると、音が鳴って花が咲く。

＜新規＞研究課題

里親養育における里親と実子の意識とその支援のあり方

研究代表者　山本 真知子
所属　人間関係学部
種目　若手研究（B）
研究期間　H28-H31

近年、虐待などの理由により実親とともに生活できない社会的養護のもとにおかれている児童が増加しています。社会的養護のもとにいる子どもの生活の場として、日本では児童養護施設をはじめとする施設での生活が8割を占めています。しかし、欧米・オセアニア諸国では保護された子どもの約半数以上が施設ではなく里親家庭で生活しています。日本は2016年6月に児童福祉法が改正され、里親・養子縁組などの家庭養護への委託が原則であることが規定され、これまで以上に里親等の家庭養護の促進が求められています。

里親制度は里親の家庭に子どもを引き取って養育する制度であり、里親には里親と血縁関係にある実の子ども（実子）や他の家族がいることは珍しいことではありません。しかし、これまで里親の実子に対する研究は国内外においてほとんど行われておらず、支援も行われていない現状があります。

本研究は里親の実子に焦点を当て、国外で一部先駆的に行われている実子支援の現状を視察し、日本で今後里親養育を推進していくにあたっての実子支援のあり方を明らかにすることを目的に行っています。今年度、科学研究費が採択され、4年間でオーストラリア、イギリスの実子支援の視察と日本において実子と里親へのインタビュー調査を行う計画です。年々里親制度とともに里親の実子への関心も高くなっており、研究の結果などから実子や里親に関する講演や里親家庭の子どもたちへの支援も行っています。本研究を通じて、実践に活かすことができる研究内容を明らかにしていきたいと考えております。

科研費 KAKENHI

＜新規＞研究課題

DV被害者支援と民間シェルターにおける米・加・日の比較研究

研究代表者　小川 真理子
所属　社会情報学部
種目　特別研究員奨励費
研究期間　H28-H30

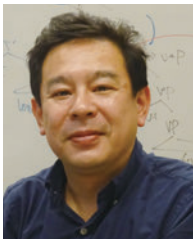
本研究は、DV防止取組先進国であるアメリカやカナダ等のDV 対応、官民の連携・協力体制、支援の専門性等の比較検討を通して日本への応用可能性を探る。また、各国の民間シェルターの実践を参照しながら、複雑化、多様化するDV被害と支援の実態を明らかにし日本の民間シェルターとの比較を通して、効果的なDV被害者支援について検討する。

2016年度は、研究計画に即して、先駆的にDV被害者支援に取り組み、研究蓄積があるアメリカ、カナダ、イギリス等の文献調査を行なった。全体的な研究動向としては、地域におけるmulti-agency approach（包括的なDV被害者支援）の取り組みや民間シェルターの運営上の困難と支援の質のジレンマ、また、複雑化するDVや多様なバックグラウンドを持つ民間シェルター利用者への支援等について分析されている。

また、本実態調査では、国内の民間シェルターおよび行政・関係機関への聞き取り調査を行なった。アメリカの調査研究で明らかにされているように、日本でも複合的なDV被害が顕著になっていることが看取された。2001年のDV防止法施行以降、DV被害者支援制度は整備されつつあるが、支援の地域格差や連携の困難等課題は多い。このような中、民間シェルターはDV被害女性を尊重した途切れのない支援を行ない、現場の声を届けるべく政策提言を行なっている。また、DV被害者支援において不可欠とされる関係機関間の連携は二極化していることが確認された。行政と民間、都道府県と市町村の連携がスムーズに行われていない現状を踏まえ、連携困難の要因を明らかにするために継続的に調査を行う予定である。

学術図書名

On Extration from Subjects: An Excorporation Account



著　者　江頭 浩樹
所属　比較文化学部
種目　研究成果公開促進費（学術図書）
採択年度　H28

本書は、生成文法理論の主たる研究対象である主語条件の再分析を試みた。主語条件とは、主語の一部分の摘出の禁止を記述したものである。この記述には生成文法理論の発展の中で、「下接の原理」や「空範疇原理」などによる様々な説明が試みられてきたが、必ずしも満足いく説明が与えられたとは言えない。そのような中、近年主語からの部分摘出が可能であることを示すデータが指摘された。特に従属節の主語からの部分摘出は非文法性を引き起こさない。一方で主節の主語からの部分摘出は主語条件が予測する通り、非文法性を引き起こすというのも事実である。この相反する事実を、ミニマリストプログラム枠組みの中で分析を試みた。その際に、英語の節構築を従来の主要部移動に頼らない、Tonoike (2008)による編出分析（Excorporation Analysis)を採用した。この分析にChomsky (2008)による「不活性条件」を改訂した「改訂不活性条件」を採用することによって従属節主語からの摘出の文法性を説明し、さらに主節主語からの摘出の非文法性を「派生の経済性」及び焦点化素性の未照合という一般原理によって説明した。編出分析に依拠したこの分析は、更なる展開をもたらした。すなわち補文標識・痕跡効果(*that/for*-trace effect)を含む「主語・目的語の非対称性」の説明である。統率・束縛理論(GB理論)の枠組みでは、空範疇原理によって説明が試みられたが、避けるべき様々な規定(stipulation)が設けられていた。しかし、本書で提案する編出分析を採用した理論は、規定を設けることなく「主語・目的語の非対称性」を改訂不活性条件によって説明可能であることが示された。

Chomsky, Noam. (2008). "On Phases." In Robert Fredin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta (eds.), *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean Roger Vergnaud,* 133-166. Cambridge: The MIT Press.

＜継続＞研究課題

人が生育する限界的環境に於ける発育発達(生活技術の発達を含む)と成熟の総合的研究

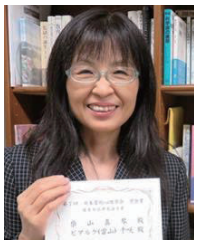
研究代表者　大澤 清二
所属　人間生活文化研究所
種目　基盤研究(A)
研究期間　H27-H30

人の身体の発育発達に関する研究成果は20～21世紀に欧米、東アジアに集中して蓄積されてきた。しかし視点を150年以前の過去や他の地域、民族に拡大すると、まともな知識蓄積といえるものは得られていない。例えば日本人なら縄文から江戸、明治期の子供の発育発達像については空想しかできない。人類史的な発育発達に関する全体像は未だに獲得できていないのが実情である。私はこの課題に挑戦するべく永年アジア各地の現地調査を繰り返してきたが、最近、次のような仮設的構造の下に研究を進めている。

人類がたどってきた発展段階に比定可能な諸民族を実査し、以下の①～⑥で得られたデータからそれぞれの人類の発展段階に相当する時代、地域の子供の発育発達を記述し、人類史的視座からの発育発達理論を構築しようとしている。
①人類の最も初期の段階は移動狩猟採集バンド社会であるが、これに相当するものとしてアンダマン海上の移動民モーケンを選んだ。続いて順に、
②移動･狩猟採集生活から定住生活に移行する社会段階としてタイのムラブリ
③未発達な園芸的農業や牧畜を営む社会段階としては、ヒマラヤ山中のシェルパ、ボーティアとミャンマー最深部のパダウンほか東南アジアの山地民
④整備された国家･農業社会に相当するものとして、東南アジア各国の農村
⑤より成熟した産業社会としてアジア各国の地方都市
⑥高度な情報社会としての日本等の先進国
等の子供たち2万人程度を身体形態学、機能発達学、生活技術、そして生活背景としてのライフスタイルについて調査している。

＜継続＞研究課題

日系国際児のバイリテラシー形成過程の質的探究とその展開



研究代表者　柴山 真琴
所属　家政学部
種目　基盤研究(B)
研究期間　H26-H30

個人の国際移動の増加に伴い、親の移動に帯同されて国境を越える子どもや親の越境後に生まれる子どもなど、幼少期から複数言語に触れて育つ子どもが増えてきた。こうした子ども達は、グローバル化社会で要請される複数言語力を習得する潜在的可能性を備えているが、他方で、二言語で高い読み書き力(特に教科学習に必要な学習言語力)を形成するのが難しいというリスクも併せ持っている。なかでも国際結婚家族の子ども(国際児)は、父親の母国に住んで現地校に通う国際児を例にとれば、現地語(父親の母語)と継承語(母親の母語)の両方で高い読み書き力を形成するのが難しい集団であると言われている。

筆者は、ここ数年、子どもを現地校と日本語補習授業校に通わせる独日国際家族(父親ドイツ人－母親日本人)の事例に基づいて、国際児の二言語での読み書き力(バイリテラシー)の形成過程を質的に解明することに取り組んでいる。本研究の研究方法論上の特徴は、1)独日国際児のバイリテラシー形成過程を「共同行為論」の立場から解明しようとすること、2)日常実践研究と二言語習得研究を交差させた研究方法を構成したこと、の2点にある。

また、Ⅰ期研究(科研費助成期間H22～25)では、先行研究から示唆された、子どものバイリテラシー形成に有利な条件を備えた家族を対象とし、Ⅱ期研究(上記採択課題／科研費助成期間H26～30(予定))では、フィールドの実態を踏まえて対象家族を拡大した。Ⅰ期研究の成果(論文の1つは日本質的心理学会「学会賞」を受賞)にⅡ期研究の成果を積み上げることにより、対象家族の実践過程に見られる家族間協働の多様性を把捉すると共に、家族の条件の違いを超えて通底する基本原理を探っていきたいと考えている。

人間生活文化研究所 共同研究プロジェクト採択課題を紹介します

大妻女子大学内における研究者間交流の促進、新たな研究課題等の発掘、競争的外部資金への応募促進を目的とする助成制度です。対象は、本学の専任教職員を代表者とする共同研究。異分野の研究者で構成されるこのプロジェクトでは、これまでに160以上の研究課題が遂行されてきました。本年度の採択課題は14件。そのうち4課題を紹介します。

学童期小児における運動器発達と食事・生活状況の関連

研究代表者　上杉 宰世
所属　　家政学部

小学生の骨折は1970年の2.4倍となっており、この原因は筋力や瞬発力などの運動能力の低下や骨量低下が示唆されている。骨量は、小学生高学年から中学生時期に最大骨量の1/4 が蓄積されると言われているにもかかわらず、日本人小児期の骨量測定データは存在していないのが現状である。

そこで、我々は小学生高学年を対象として、骨量を含む体組成成分を測定し、生活習慣や食事調査を実施することにより基礎データを収集することを目的とした。

都内の小学校2校5、6年生の児童を対象とした。測定は、1996年に開発されたInbody 体組成分測定装置を用いた骨量、体脂肪率、筋肉分布の他、血圧、握力、ロコモティブシンドロームチェック、椅子立ち上がりテストを実施した。調査項目は、カルシウムを多く含む食品の摂取頻度と摂取量、睡眠時間、運動実施状況とした。

結果は、まだ解析中であるが、骨密度や血圧の低い子どもが多い現状を把握することができている。

機能美に特化した身障者と健常者が共有できる服の開発研究

研究代表者　大網 美代子
所属　　家政学部

誰もがおしゃれを楽しむことができる環境を目指して、ものづくりを通した教育的効果とデザイン設計の双方を追求し、身障者と健常者が「共有できる服」の開発研究を行っている。身障者の個別対応服は価格が高く、ファッション性のあるデザインや選択肢が少ないのが現状である。そこで、身障者と健常者（女子大生）が衣服の共有をできれば、問題解決になると考えた。「共有できる服」は脚や腕の可動域・座位姿勢に対応した機能を備え、デザイン性を加えたものである。現在、サンプルの改良を重ねて作業療法士による検証を行い、学内外やアパレル業界へのアンケート調査を実施して機能美を実証していく。本研究の意義は、衣を通して、笑顔になること。自己を受容するとともに他者を受容し、共に生きる社会に向けて、バリアを取り払うことにある。体系的なデザイン設計を構築し、社会のニーズに合わせて提案をしていきたい。

アカデミック・コミュニケーション能力育成を目指す英語教育の研究

研究代表者　服部 孝彦
所属　　国際センター

本研究の目的は、日本の大学生に求められるアカデミック・コミュニケーション能力の育成、すなわちアカデミック・イングリッシュ力をつけるための指導法と教材開発をすることである。アカデミック・イングリッシュの力とは、大学の専門分野において求められる自分の考えを論理的で明晰に英語で表現できる力で、日常英会話とは全く異なる。アカデミックな文章の特徴の一つは、論点が明確であり、筋道が通っていることである。アカデミック・イングリッシュでは、パラグラフの主題と書き手または話し手の主張が冒頭部分にはっきりと示され、パラグラフを通じてそれが一貫してサポートされている必要がある。日本の大学では、残念ながら学生がアカデミック・イングリッシュの力をつけるための指導が十分に行われているとは言えない。本研究では、パラグラフ・ライティングに関する教材開発を中心に研究を進め、その研究成果の一部は、国内および海外の学会の研究大会で研究発表を行った。

「海育（海行く）」の取り組み：子どものための磯の生きものガイドブック制作

研究代表者　細谷 夏実
所属　　社会情報学部

本課題では、子どもたちが海に親しみ、自然や生きものの大切さを学び成長していく「海育（うみいく）」というキーワードに、現場に出かける＝「海（に）行く」という言葉を重ねるという新たなコンセプトのもと、活動を行った。

具体的には、「海育（海行く）」を実践するため、子どもたちが現場に出かけ、生きものを発見したり、興味を持って観察したりする際に使いやすい「子ども対象の生きものガイドブック」の制作を目指した。

課題の期間内に、観音崎自然博物館及び東京大学三崎臨海実験所の協力を得て、観音崎と荒井浜の磯をフィールドとして選び、ガイドブック制作の素材となる生きものの調査を行った。観音崎では、子どもたちの活動にも参加し、子どもたちが特にどのような生きものに興味を持つかについての調査も行った。

現在、調査結果をもとに、「観音崎の磯の生きものガイドブック」、「荒井浜のフジツボガイドブック」をそれぞれ制作中である。

大妻女子大学 戦略的個人研究費採択課題を紹介します

本学教員の研究活動の活性化・高度化、競争的外部資金への応募促進を目的とした助成制度です。平成26年度に新設され、研究所は本学総務グループと協働で管理・運営に当たっています。本年度の採択課題は37件。そのうち4課題を紹介します。

クレオール化のダイナミズムと白人性の多様性―バルバドスとトリニダードの比較研究

研究代表者　伊藤 みちる
所属　　国際センター

カリブ海には植民地支配を経て、多様な人種・エスニシティ、階層、文化が複雑に関連しあう独特のダイナミズムが作用する多文化共生社会が展開されている。本研究は、旧英領カリブ諸国のバルバドスとトリニダードにおけるヨーロッパ系市民の白人優越信仰を含むアイデンティティ:「白人性」とその構築過程に着目し、グローバル化が進む現代社会における文明の衝突、偏見や差別の構造の解明を試みるものである。昨夏、合計36時間の旅路を経て、日本から遠く離れた現地で、人口の1%程度を占めるヨーロッパ系市民のオーラル・ヒストリーを記録すべく奔走した。その姿が現地で報道されたことがきっかけとなり、彼らの独特な社会構造や歴史の再認識・再検証が行われ、奇しくも独立50周年の節目に大きな反響を呼んだ。上記二国でのヨーロッパ系市民個人の経験を比較分析することで、現代グローバル社会における異文化許容・共存に関し実証的に一石を投じたい。

意思確認が困難な特別養護老人ホーム入居者のストレス把握と除去に関する研究

研究代表者　井上 修一
所属　　人間関係学部

高齢者ケアの現場では、認知症により言葉を発することができなくなった方の思いを汲み取ることに、日々心を砕いている。今回、戦略的個人研究費の支援を受け、特別養護老人ホームにおいて意思確認が難しい方を対象に、唾液アミラーゼの測定を通したストレス把握を行った。唾液アミラーゼは、不快な刺激で活性が上昇し、快適な刺激では逆に低下する。こうした知見をもとに、8名の入居者にご協力いただいて、約3か月にわたってサービス提供の前後で唾液アミラーゼの値を測らせて頂いた。その結果、それぞれが不快に感じる場面や心地よい場面が明らかになってきた。ある方は、家族との面会の後、唾液アミラーゼの活性が低下することがわかった。この方にとって、ご家族との面会が心地よい時間になっていると推察できた。今後は、ケアの工夫によってストレスが低下するか(快適さが向上するか)、さらに声なき声に真摯に向き合っていきたい。

近代における超越と表象の相関を主題とする比較文化研究の基盤整備

研究代表者　城殿 智行
所属　　比較文化学部

EU離脱を選択したイギリスの国民投票に続いて、アメリカ大統領選もまた、帝国主義全盛の頃に見た夢よ再びとばかりに、他国との民主的な政治協調や経済連携を絶つ選択をした。かつて、それぞれに繁栄を謳歌した両国民による、いずれも極端に自閉的な選択は、彼らがこれまで歴史的に働いてきた自らの政治・経済・軍事的な侵略行為自体が招いた結果に、ついぞ直面し得ない、典型的な神経症例を私たちに提示している。もっとも、私たちがもはやそれなしでは生活できない必然的なものであるかのように錯視しつつある資本主義自体が、恐慌によってしか次善の決済をみない、永遠に先延べされた信用を偽装する神経症システムであるわけだが、資本主義経済という名の神経症がもはや避けがたい次善の／もしくは必然的な歴史過程であるかのように偏在する現代を生きる私たちにとって、今後、どのような未来を構想することが可能か。それを表象文化批判の観点から探ろうとするのが、当該研究である。

学長要望課題「大学教育の改善に関する研究」

アクティブラーニングとしてのインターンシップの教育効果に関する研究

研究代表者　本田 周二
所属　　人間関係学部

インターンシップ(IS)とは、学生が在学中に自らの専攻、将来のキャリアに関した就業体験を行うことであり、キャリア教育の一環として位置づけられています。近年、日本全国の大学においてISの普及に関わる取り組みが数多く行われるようになってきていますが、その教育効果に関して、理論的枠組みを用いて実証しているものはほとんど見られません。そこで、本研究ではISを大学教育におけるアクティブラーニングの一形態として捉え、その教育効果について量的・質的アプローチに基づいて明らかにすることを目指しています。具体的には、量的アプローチとして、夏のISを実施した学生を対象にプレポスト調査を実施しました。また、質的アプローチとして、受入企業やコーディネート機関へのインタビュー調査を日本各地で実施しているところです。本研究により、ISの教育効果を理論的に整理し、より良いISプログラムに関する示唆を導き出せればと考えています。

電子書籍「Otsuma eBook」

人間生活文化研究所では、電子書籍の出版を行っています。電子書籍ならパソコン、タブレット、スマートフォン等にダウンロードして、いつでもどこでも手軽に読むことができ、本棚のスペースをとらず、色あせることもありません。また、印刷・製本・輸送費など、出版にかかる費用を大幅に削減することができます。欠品・絶版になるリスクもありません。出版された書籍にはISBNが付与され、ウェブサイト「Otsuma eBook」より世界中に発信されます。

Otsuma eBook Recommended Titles ≫ http://www.ihcs.otsuma.ac.jp/ebook/

『ハワイ語の世界』

著者　古川敏明

著者のことば

ハワイは王国、移民、戦争、観光といった歴史の側面を持つ、多言語で多民族な社会です。誰もが知る観光地ですが、そこで暮らす人たちにとっては日常生活の場でもあります。本書はそんなハワイのことばと文化に関するさまざまなトピックをとりあげています。アメリカの州であるハワイでは英語が話されています。でも、ハワイの人たちのコミュニケーションにおいて鍵を握っているのは、先住民語であるハワイ語と、移民の言語であるピジンです。これらのことばを切り口にして、ハワイで暮らす人々が持つ世界観に迫ります。

発　行：2016年10月4日
形　式：PDF
ISBN：978-4-907136-10-9

大妻女子大学
文学部コミュニケーション
文化学科　専任講師
古川 敏明

『什錦飯』（原本 大妻コタカ著『ごもくめし』）

訳者　趙方任

訳者のことば

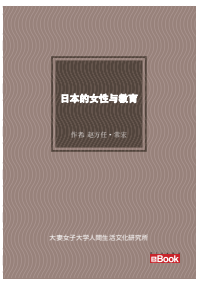
この本は大妻女子大学創始者である大妻コタカ先生が著した『ごもくめし』の中国語翻訳である。『ごもくめし』は自伝風雑文集だが、本書よりよく窺える、金銭・権力に無欲で、ひたすら教育及び学生の生活に打ち込む教育家の風格は教育を国の根本に掲げながら、一方一人っ子政策により教育贅沢化し、拝金主義も横行している現在の中国教育界にとってよい「鑑」になると期待したい。

発　行：2016年12月23日
形　式：PDF
ISBN：978-4-907136-14-7

大妻女子大学
国際センター　准教授
趙 方任

『日本的女性与教育』

著者　趙方任・常宏



著者のことば

マナーが悪い、民度が低いとよく指摘される中国では最近素養教育重視の機運が高まってきた。しかし、素養教育に関して中国では政府主導で行う場合が多く、最近儒教復古の傾向も鮮明になっている。中には子どもの統一性ばかりを素養と位置づけし強要する教育者もいるし、大きな目標を持つことを教養として生徒に吹聴する先生もいる。本書を以って日本の女子教育の歴史を回顧しながら、母親の役割や、日常の中から素養教育を行う日本の手法を紹介し、中国の素養教育に一石を投じたい。

発　行：2016年12月23日
形　式：PDF
ISBN：978-4-907136-15-4

科研塾

科研費申請について情報を発信しています。

電子申請システム e-grant

学内の研究費助成事業に関する情報を発信しています。

Otsuma eBook

未刊行の研究資料などを電子書籍として出版できます。

近　刊

『山王祭と大妻学院 大妻女子大学シンポジウムの記録シリーズ』

編者　是澤博昭／大妻女子大学人間生活文化研究所

地域連携推進センター地域貢献プロジェクト「祭りをとおした大学博物館の地域貢献ー申年の山王祭」の一環として行われたシンポジウムの内容を文字化し画像資料とともに再編成したもの。「大妻女子大学学祖大妻コタカの日枝神社への信仰は篤く、戦前、大妻神社では毎月一回、日枝神社の神主が祝詞をあげ、山王祭当日には全校生徒が日枝神社を参拝した（発表内容の一部）」。
シンポジウムにおける口承を後世に伝えるべく、人間生活文化研究所では本書の製作を企画した。（人間生活文化研究所　下田記）

形　式：PDF

大妻女子大学
博物館　准教授
是澤 博昭

国際学術研究・協力・交流事業 活動報告①

■ 平成28年度 人間生活文化研究所を訪れた方々

10月中旬：ミャンマー連邦共和国モン州の**マハーミャイン僧院より、最高責任者Vimala師、Vicitta師、Aung Lwin Oo執事**を招聘しました（左下写真）。
10月下旬：ネパール連邦民主共和国より、**本学大学院修了生Usha Acharya博士、Binita Rai助手（ともにトリブバン大学）**を招聘しました。
11月中旬：ミャンマー連邦共和国より、**法制・特別問題評価委員会メンバーで前教育省教育計画訓練局長のU Bo Win氏、教育省・副事務次官U Kyaw Win氏、副部長U Than Naing氏**を招聘しました（右下写真）。

マハーミャイン僧院の僧侶らー
花村邦昭理事長・学長、大澤清二所長とともに
（中央より右にVimala師、Vicitta師、Aung Lwin Oo執事）

大妻高校で書道の授業を見学するミャンマー高官ら
（左からU Than Naing氏、U Bo Win氏、U Kyaw Win氏）

平成29年度　研究費助成事業

本研究所が実施する学内における競争的研究資金のうち、平成29年度「共同研究プロジェクト」「研究員研究助成」の公募情報が公開されました。とくに「共同研究プロジェクト」は、助成金の申請額の上限が1課題当たり100万円、申請書類の項目内容も科研費と同様で、「競争的資金」としての性質が強いものとなっております。ぜひこうした内部競争的資金への申請を科研費申請のステップとしてくださるよう、お願いいたします。

共同研究プロジェクト

＜対象＞平成29年度本学**専任教職員**を研究代表者とする「人間の生活と文化」に関する**共同研究**（研究組織は学内の学部や学科等を横断した複数人で構成してください）
＜申請金額＞100万円まで

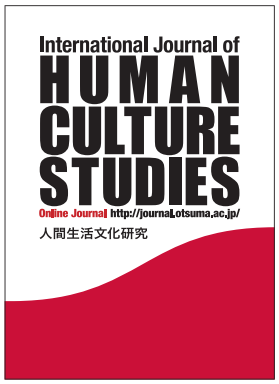
研究員研究助成

＜対象＞平成29年度本研究所**研究員**が指導教員の指導を受けて行う「人間の生活と文化」に関する研究
＜申請金額＞20万円まで

＜申請受付期間＞平成29年2月1日（水）～22日（水）
詳しくは本研究所電子申請システムサイト(e-grant)をご覧ください。》

https://www.shobix.co.jp/egrant/

オンラインジャーナル『人間生活文化研究:International Journal of Human Culture Studies』



『人間生活文化研究』は、2012年6月に人間生活文化研究所が創刊したオンラインジャーナルです。
本誌では「人間の生活と文化」に関わる研究論文の投稿を随時募集し、これまでに**約160編の論文を掲載**してきました。トピックは、被服学、食物学、児童学、ライフデザイン学、日本文学、英文学、コミュニケーション文化学、社会情報学、人間関係学、人間福祉学、比較文化学など広範囲に渡ります。
投稿者の資格に制限はありません。多言語対応、投稿無料で、査読を経た論文は迅速に掲載されます。また、J-STAGEに搭載されていることから、論文が世界中の人の目に触れる機会が格段に多くなります。

≫ **http://journal.otsuma.ac.jp/**

投稿無料　**随時募集**　**投稿資格制限なし**　**原著論文・短報は査読あり**　**字数制限なし**

No.26(2016) 掲載論文一覧

▶ 原著論文

論　題	著　者
The Caribbean Community Single Market and Economy: The rationale behind the obstacles and prospects for the integration of the Commonwealth Caribbean	Michiru Ito(International Center)
Epistolarity of Email	Sanae Tokizane (Faculty of Language and Literature)
現代的ガバナンスの形成と社会情報学的課題	正村 俊之(社会情報学部)
ラットにおけるヘキサクロロベンゼンの母親体内蓄積と 母乳移行に対するpaired feedingにおける脂質レベルの影響	酒本 光子(大学院)ほか
日本とスリランカの都市近郊で生活する子どもたちの環境保全活動参加意欲に関する意識の分析	宮崎 絵理(埼玉大学)ほか
女性が選好するオフィス環境・アメニティ空間と家具に関する研究	中川 麻子(家政学部)ほか
罪悪感をからくも逃れて ―『終わりなき日々』の結末をめぐる右往左往―	山名 章二(大妻女子大学)
友人関係における動機づけと友人とのコミュニケーションおよび精神的健康との関連	本田 周二(人間関係学部)
サイクロン常襲地域における被災後の復興課題に関する研究 ―バングラデシュにおける定性調査をもとにした事例研究―	日下部 尚徳(文学部)
専任カウンセラー不在の学生相談室の問題 ―開設33年目のX大学学生相談室における後向調査から―	坂本 憲治(筑波大学)ほか
Constructing and reproducing whiteness:An oral history of French Creoles in Trinidad	Michiru Ito(International Center)
*Work: A Story of Experience*における「作家業」の不在が意味するもの	杉山 眞弓(大学院)

▶ 報　告

論　題	著　者
大妻神社と大妻太郎兼澄 ―資料調査研究報告1―	真家 和生(博物館)ほか
フードコーディネートと社会貢献	髙橋 ユリア(短期大学部)
地域連携デジタル・ネットワーキングに関する研究 ―「灰干しがつなぐ被災地連携ネットワーク」の可能性と課題―	干川 剛史(人間関係学部)
大妻女子大学博物館所蔵の手芸裁縫作品調査報告(1)	中川 麻子(家政学部)
医療領域における臨床心理実習の多面的評価方法に関する研究	古田 雅明(人間関係学部)ほか
子ども・家庭支援に向けた地域アセスメントシートの開発研究	加藤 悦雄(家政学部)
ソーシャルワーカーに対するグループ・スーパービジョンを考える ―ピア・スーパービジョンの実施から―	丹野 眞紀子(人間関係学部)
学生相談におけるCBTグループの活用 ―PCAのグループ専門家を対象とした模擬体験を基に―	西河 正行(人間関係学部)ほか
晩年の大妻学校創設者の想い ―資料調査研究報告(1)―	真家 和生(博物館)ほか
心理臨床家の専門性発達に関する基礎的研究 ―大学院教育における臨床訓練に焦点を当てて―	児玉 成未(大学院)ほか
根粒形成における感染シグナル伝達系の解析	川村 景子(大学院)ほか
天覧と遙拝 ―「見えない傍観者」補注―	城殿 智行(短期大学部)
マス・メディアは3・11から何を学んだのか ―東日本大震災後のマス・メディアにおける制度・組織改革に関する包括的研究―	五十嵐 浩司(文学部)

論　題	著　者
職業教育をめぐる各国の比較研究 ―「普通教育」と「職業教育」の適正な「相互接近」へ向けて―	川合 宏之(流通科学大学)
イギリスの階級について	松岡 美香(大学院)
ヘミングウェイ作「雨の中の猫」のイタリア語を「復元」すると　―仮説と解釈―	山名 章二(大妻女子大学)
子育て中の養育者のニーズと育児支援のあり方についての一考察	薊 奈保子(大学院)ほか
育児期女性のwell-beingに繋がる要因とそれを支える支援	薊 奈保子(大学院)
理想自己と現実自己の差異と自己注目が劣等感に与える影響	中村 純子(大学院)
運動習慣のない若年女性における骨格筋内脂肪の分布	中田 千聡(大学院)ほか
栄養士養成施設卒業生の体格と食意識に関する縦断研究	佐野 美里(大学院)ほか
ルールからみた相撲の世界 ―相撲研究の一つの視点―	大熊 孝夫(大学院)
道命阿闍梨と恋歌 ―好色説話の周辺―(下)	柏木 由夫(文学部)
3歳未満児の自発性を育てる保育カリキュラムの開発　―エマージェント・カリキュラムを中心に―	阿部 和子(家政学部)
日本における家庭用電化製品の導入と普及　―初期家電製品データベース構築の検討―	林原 泰子(家政学部)ほか
大学における初年次教育の現状と課題	川合 宏之(流通科学大学)
最新の情報処理技術を活用した手作り教材の制作と教育実践　―国内外の共同研究者との協働の取り組み―	生田 茂(社会情報学部)ほか
ICTにおけるEUレベルの政策方式の変化がガバナンス・アプローチにもたらす示唆 ―修正版「NMG」か, それとも原点回帰か?―	井上 淳(比較文化学部)
内蒙古东部(科右前旗)寄宿中学学生健康知识的研究 ―城市和农村比较―	烏雲格日勒(内蒙古師範大学, 中国)ほか
和服の柄合わせに関する研究 (第2報)	渡部 栞(大学院)
高齢者の低栄養予防のための知識と健康観に関する研究　第一報 高齢者の健康観および低栄養予防に関する意識調査	伊藤 陽子(大学院)ほか
場面によって変化する自称詞及び対称詞の研究	ニン ティ ニャン ヴァン(大学院)
タイにおける栄養素摂取量の推定方法に関する研究　―青年期タイ人のためのFFQの開発および妥当性の検討―	小林 実夏(家政学部)ほか
アニメ版『風の谷のナウシカ』に見られる裏返し構造の生成　―原作漫画版との対比から―	大喜多 紀明(京都民俗学会)
日本人妊産婦における葉酸摂取量と葉酸サプリメント利用の関連	中山 惠理(大学院)ほか
アウグスティヌス『告白録』1～9巻のキアスムス構造に関する考察 ―異郷訪問譚の構造的特性が構成に与えた影響―	大喜多 紀明(京都民俗学会)
パン食の普及 ―大規模パンメーカーの誕生―	前潟 由美子(小泉和子生活史研究所)ほか

▶ 資料

論　題	著　者
Magdalen College MS. 228 and the Kirishitan Bunko Library Guia do Pecador ―Further traces of Kirishitan Neo-Latin―	Akihiko Watanabe (Faculty of Comparative Culture)
日本文化界吳昌碩関連年表	松村 茂樹(文学部)
子どもの授業理解度とコミュニケーション力の関連　―児童扶養手当受給世帯に焦点をあてて―	三沢 徳枝(佛教大学)
マウスの腸内代謝を介した各種食品成分の慢性炎症抑制メカニズムの研究	青江 誠一郎(家政学部)ほか
小児専門病院におけるNST活動活性化プログラム作成のための予備的研究	磯田 有香(大学院)ほか
加工により成分変化した昆布の摂取が食餌性肥満モデルマウスの内臓脂肪蓄積に及ぼす影響	山岸 あづみ(大学院)ほか
幼児を持つ保護者のための食育意識尺度の作成(予備調査)	吉田 真知子(大学院)ほか
学童期小児の運動器(骨と筋肉)発達に及ぼす生活習慣因子の影響	明渡 陽子(家政学部)ほか
ミセル性リン酸カルシウムがラットのカルシウム吸収に及ぼす影響	山中 千恵美(大学院)ほか
テキストマイニングによるジオパーク研究動向の分析 ―『日本のジオパークに関連する文献』2005～2014年を中心に―	肖 錕(北海道大学)

▶ オンラインジャーナルの最新号およびバックナンバーはホームページよりご覧いただけます。≫ http://journal.otsuma.ac.jp/list.html

国際学術研究・協力・交流事業 活動報告②

中国政府派遣研究員の烏曇格日勒氏(内蒙古師範大学体育学院・教授)が、本研究所における1年間の研究期間を終え帰国しました。研究の成果「内蒙古东部(科右前旗)寄宿中学学生健康知识的研究―城市和农村比较―」は、上記オンラインジャーナル『人間生活文化研究』にて公表されています。

国際学術研究・協力・交流事業 活動報告③

■ 本学図書館と協働し、私立大学図書館協会「寄贈資料搬送事業」に採択！！

本研究所では、ミャンマー連邦共和国国立図書館に対する資料整備支援事業を行っています。その事業の一環として、平成28年度初めて、本学図書館と協働し私立大学図書館協会「寄贈資料搬送事業」に申請。

第1回公募、第2回公募ともに採択されました。これにより今年度は、700冊余りの学術研究図書（英文）をミャンマーの国立図書館（ネピードー）に送ることができました。

■ 図書を寄贈していただきました！！

山名章二氏（大妻女子大学名誉教授）より、個人蔵の英文図書を寄贈していただきました。これらの図書も今後ミャンマーの国立図書館に送られます。寄贈図書は随時募集しております。ご協力くださる方は、本研究所までご連絡ください。

山名章二名誉教授

ミャンマーへの図書寄贈準備作業の様子

人間生活文化研究所 研究費助成事業関連 カレンダー　2017

	戦略的個人研究費	共同研究プロジェクト	研究員研究助成	大学院生研究助成（A）（B）
1月		1.10 予算執行伝票等の受付再開 1.13 「旅費」に関わる計画書等の提出締切（17時迄） 1.26 「旅費」の予算執行伝票等の提出締切（17時迄）	1.13 「旅費」「謝金」に関わる計画書、稟議書の提出締切（17時迄） 1.23 平成29年度研究員願書提出締切	
2月		2.1 平成29年度応募受付開始（2.22迄） 2.14 予算執行伝票等の提出締切（17時迄）		
3月	3.17 「収支等実施報告書」提出締切	3.24 「研究実施報告書」提出締切		3.10 「収支等実施報告書」提出締切 中旬頃 平成29年度公募情報公開（応募受付は4月） 3.21 「研究実施報告書」提出締切
4月	初旬 平成29年度応募受付開始（下旬頃迄）	初め頃 平成29年度採択者内定		

※ このカレンダーについてのお問い合わせ先は、☎03-5275-6047（千代田キャンパス内線5650）です。

大妻女子大学人間生活文化研究所
〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地
大妻女子大学千代田キャンパス図書館棟6階
Tel: 03-5275-6047　Fax: 03-3222-1928　E-mail: info@o-ihcs.com
HP : http://www.ihcs.otsuma.ac.jp/

▶ ニューズレターの最新号およびバックナンバーはホームページよりご覧いただけます。